森の名手・名人シリーズ28

名人 山口 郁（75）
岐阜県揖斐郡揖斐川町

聞き手 水野 京介
岐阜県立岐阜農林高等学校三年
平成20年取材

和紙作り
両親の背中を追って

「森の名手・名人」とは、森に関わる仕事や地域生活に染み込んだ営みのうち、優れた技をもってその業を極め、他の模範となっている達人で、毎年、全国で約100名が選定されています。岐阜県においては、現在、41名の「森の名手・名人」がいます。

この「森の名手・名人」を「森の"聞き書き甲子園"」に参加した高校生が「聞き書き取材」をしたものの中から誌面の関係上要点を抜粋したものです。なお、年齢、住所、学年は取材当時のものです。

1. 村おこしのために

私の親も紙屋の生まれでしたの。それで親のやることを見ていただけですけど、嫁いでから母親が病気になり紙漉きする人がいなかったから2年ちょっと見よう見まねでやりました。それから紙漉きというのは、40年間やっていませんでした。この坂内村というところは大変寂しいところでね、村の活性化のために何が出来るかなぁということで悩んでいました。そこで、「おめぇ紙漉きやれぇ」って誰かにちょっと声かけられたんです。「あぁ、これなら何とかできるかな」とそういう思いから紙漉きが始まったわけ。

短いコウゾの木をとってきて、まず皮をむくことから始めました。餅を蒸す機械で蒸したり、少しずつ少しずつたくったり（木の皮を剥ぐこと）、渋皮とる仕事したりしてね。和紙作りは男の仕事やから分からないんですけど、自分で勝手にソーダ（過性ソーダ…紙作りに使われる化学薬品）を使ってみて、煮たりして、「あ～これで紙できるかなぁ」と思いながら、紙たたきという力仕事も1人芝居ですから自分でやって、小さな紙漉くやつで漉いてみたら、「ほぁ～紙が出来た!!」ようやく自分でもやれそうやなぁ、という感じで始まっていきました。

2. いい紙を作るために

自分も子供のころ両親の後ろ姿は見てきたので、親たちの話を夜こたつに入りながら聞いている覚えはあったから、「ほらまて、こんな時どうやったな?」そう言ってくれる人が周りにおりましたけど、やっぱり今はもう誰もいないの。みんな亡くなってますから。だから、亡くなった親の姿を思い出すしかなかったのね。そうしてやりながら、やりながらするんで、本当に1枚の紙が出来るまでには3年ほどかかりました。

でも、1人芝居って楽しいもんでね。結構悩みもし、苦肉の策もやりました。一貫目（3.75kg）に対してソーダをどんだけか入れて、「これでどう?」というふうにして。小さいころ聞いた、コウゾの煮方と紙をそろえる時の、「今日のはちょっとソーダが足らなんだかなぁ」と言う女性の会話と、あくる日父親がまたコウゾを炊き直す姿を思い出して、そんなプロのような人たちでも実際作業しながら和紙作りをしとったことを覚えてて。「あ～、わからんくて当然や」と。それからコウゾの目方もソーダの目方も自分なりに決めていきました。そうして、苦肉の策でやっていくうちに「あ～、やっと少し紙らしくなったなぁ」と思えるやわらかさで炊けるようになったのが、和紙作りを始めて3年目でした。

3. 伝統を伝えるために

和紙作りが形になりかけたとき、今度は「賞状を作らないか!」という話をもらって、子供たちの賞状を作ろうと思いました。生徒たちとね。あくる年から毎年、毎年、賞状はもう12号目かになります。12年間毎年、毎年、その卒業生たちに送っていたということです。それをきっかけに、生徒たちに紙漉きをやらす。で、学校もね、課外授業で組み込んで下さってそれをやってきたわけです。

このことをやることによって方々の人たちがここを訪ねて下さって、みんな珍しいからカメラで撮るんですよ。どうぞって何気なくそう言ってきましたけども、やっぱりそうやって大勢の人が訪ねてくれて今日まで続いたのかなぁと思います。

そうする中で、古代の和紙というふうなキャッチフレーズで取材に来てくれた人がいたんですよ。いろいろ紙に関わる話を教えてくれるんですね。私は、もう単なる自家用で障子にする紙だけと思っていましたけど、そうじゃなかったんです。もう、「ここの和紙作りは千年あまりの歴史があるんだ」と、そういう話を聞かされて、お～っと驚きでした。そんなこと今まで知らなかった。何気なくやってることって案外知らないんですよね。

4. 和紙作り

和紙を作るためにはたくさんの工程がいります、それもたった一つの工程でも手を抜いたら良い紙じゃなくなっちゃう。だから一つ一つの工程をしっかりやらなきゃいけません。例えばコウゾの渋皮を取ったり、繊維を伸ばしたり、そういう一つ一つの工程を繰り返してやっと一枚の紙ができるということです。

和紙を作るにはノリウツギっていう植物がいって、紙にする妙薬みたいなもんですよ。それを入れて、初めて紙になる。ノリウツギは冷たいほうがノリの強さが出るでな。それで硬い紙が出来る。紙作りの本当の要です。それも自分で山からノリウツギを切ってきてノリになるまでして、そうして合わせながら紙作りをするんです。それに一つのことをやるにつれて、いろんな植物の名前が覚わりますね。楽しいですよ、冷たいですけど、「う～ん、そうなんだぁ。」っていう感動があってね。

夏の紙作りは暖かいからノリが利きませんで、ぼやけているんです。モヤモヤした柔らかい紙が出来るんです。だから、紙作りだけは冷たい水、冷たい空気ということです。楽しいよ、コポン、コポンって音がするから。そういう魅力に惹かれて紙漉きが今日まで至ってますけどな。年が若かったらもっと楽しかっただろうと思いながら。

5. 白い和紙を作るために

和紙を白くするのには、雪ざらしということをやります。例えば、美濃市の紙漉きではコウゾを束ねて川でさらします。それでふやけて白くするの。でもここではそれが出来ないの。渓流というかすごい淵だらけでそんな場所がないの。ですから自然に降る雪を利用する。それで雪ざらしをする。

作業としては、きれいに渋皮をとったコウゾを水に濡らして雪の上にさらす。そうすると太陽の光と雪の冷たさとが相まって、コウゾのあまーい甘皮っていうか浮遊物が、空気中に消えていくということがあるの。まぁ、雪の上で白くするということです。雪の上に置けば、自然に太陽の光が当たって雪がとけるので水分もあります。でも、裏はさらされませんからたまには裏返したりして。水にふやけてまた広げてさらして、そして、初めて「紙」作りというのにかかる。そこのところがいい紙を作る要ですから。

6. 和紙作りの喜びと苦労

「あ～紙が出来てうれしい」出来た、出来たってみんなに見せて回って、それで子供たちにも和紙で賞状を作って印刷してもらったらすごく墨ののりがいいんです。それで印刷の人も、昔のなつかしい紙にこんなんさしてもらってというふうで感謝の気持ちもいただいて、いいことしたんだなぁと一瞬思いました。でもね、それが毎年、毎年となると材料の表情が違うのでそれに苦労します。手作りですからね。でも、その手作りの良さがいいんだと、人が言ってくれるのに甘えています。それで今日も続いていると、11月15日過ぎると、またコウゾ剥ぎから始まります。

7. 子供たちを見て

今の人はやっぱり、大自然を好む人が少ないですよね。どっちかといったら、箱の中で仕事するのが好きな人が多いですよね。そういう人たちは、こういう森とか自然とかから少し離れてますから、自然の知識とかが身につかないですけど、社会に出るまでに一回はそういう知識を身につけてほしいと思います。もし、サラリーマンになっても知識はその人の財産として残りますから。

この家は、和紙を含めてすべてのものが山や自然のもので出来ています。畳は、ワラで出来ているし、戸もふすまも全て自然の「恩恵」から出来ています。だから、紙を大切にすることは木を大切にすること!!

木を大切にすることは森を大切にすること!!

森を大切にすることは地球を大切にすること!!

それで、紙を大切にしなければならないと改めて気付きました。だから、そういうことを今の若い人たちにもっと伝えていけたらと思いますね。

～コウゾの木～

～子供との交流～

名人 山口（やまぐち） 郁（いく）さんのプロフィール

●生年月日：昭和7年10月29日生まれ

●職　業：紙漉き名人

かつては、地元岐阜県揖斐郡揖斐川町（旧坂内村）では各家庭で行われていた紙漉き（彼女も19～21歳頃手伝っていたが伊勢湾台風を境に廃れていった。）を、20年前から材料のコウゾを見つけ、他地域の紙漉きの様子を見学して、また、紙漉きをする道具は家にあったものと、村の資料館にあったものを利用して紙漉きをはじめた。当初材料は麻やケナフも利用したが、現在は地元に自生しているコウゾを利用している。

地元坂内小学校では、毎年の卒業証書を彼女の指導を受けながら作った和紙で作っている。素朴な作品の評価を聞きつけて、愛知、三重など遠くからも紙漉き体験を楽しみにやってきて彼女の指導を受けている。

※原本は長文のため、文章の一部を割愛しています。

【森の名手・名人編集担当
公益社団法人
岐阜県緑化推進委員会　佐藤正吉】